

令和元年度第1回金沢市総合教育会議

日時 令和元年8月23日(金) 14:15~15:30

場所 金沢市役所7階 第3委員会室

開会

(高葉企画調整課長) それでは定刻となりましたので、ただ今より令和元年度第1回金沢市総合教育会議を開催いたします。私は会議の事務局を担当させていただきます企画調整課長の高葉でございます。よろしくお願いいたします。

本日の会議には1名の傍聴希望がありますことをご報告いたします。

本日の出席者ですが、お手元の出席者名簿をご覧ください。なお、本日は今回のテーマに係る関係者として、土村産業政策課長、市立工業高等学校の田鶴副校長が出席をしています。

それでは、開会に当たりまして、山野市長から挨拶があります。

1. 市長挨拶

(山野市長) 本日はご多用のところ、お越しいただきまして、心から感謝をいたします。最近、いろいろなところの挨拶などで、冒頭にAIやIoT、ロボットという言葉を使うことが多いのです。新聞やテレビを見ていると、最近、このような言葉を目にしない、耳にしない日はないのではないかと。そのような時代、さらに第4次産業革命だとか、Society 5.0という言葉が毎日のようにどこかで目にして耳にします。

もう、好むと好まざるとにかかわらず、間違いなくそのような時代はやってきます。そのためにも、行政としては、われわれ大人もそうかもしれませんが、それに対応できるような子供たちの環境をつくっていくことが必要なのではないかと思っています。

ご案内のとおり、2020年度からはプログラミング教育が始まってまいります。プログラミング教育とか、プログラミング的思考という表現で言われることもありますが、そのようなことを子供たちに提供していくために、金沢市は「金沢市立小学校プログラミング教育ベーシックカリキュラム」を策定し、モデル校での成果と課題を踏まえ、明年度から小学校全校実施が円滑になるように準備を進めているところです。

また、側面的な形でもバックアップしていかなくてはいけないということで、今日は産業政策課長や市立工業高校副校長にお越しいただいているのは、小学校の子供たちだけではなく、社会全体としても環境を整えていかなければいけないということからお越しいただいているところです。教育委員の方々から忌憚のないご意見をお聞かせいただければと思っています。

二つ目のテーマですが、先般、長土堀青少年交流センターが開館をいたしました。ご案内のとおり、1階には長土堀公民館もあります。すぐ隣に中央体育館もあります。歩いて10分弱のところには市民芸術村もあります。そして、長土堀青少年交流センターの中にはこども科学財団など、青少年に関わる施設を集約することによって、子供たち、青少年を育成する、そういう一つの拠点になればと思っています。

ただ、建物があるから万全というものではありません。金沢市の全域から子供たちが毎日来られるわけではありません。そこを拠点としてその思いを市内全域に広げていくことが大切なのだと思います。そのようなことも踏まえて、教育委員の方々の忌憚のないご意見も頂ければと思います。本日は本当にありがとうございます。

(高菜企画調整課長) それでは早速ですが、協議に移りたいと思います。本日の協議題は、一つ目「ICTを活用した教育の推進について」と、二つ目「青少年の育成について」の二つにさせていただきました。この協議題は、主として教育委員会の所管でありますので、まず、野口教育長から趣旨をご説明いただき、以降の進行についてもお願いを申し上げます。

2. ICTを活用した教育の推進について

(野口教育長) それでは、本日の協議題一つ目の入らせていただきます。本日の協議題の一つ目は、「ICTを活用した教育の推進について」ですが、本市におけるICTを活用した教育の現状、また、成果と課題について、始めに事務局からお伝えをして、今後のICTを活用した教育の基本的な方向性について検討したいと考えております。

情報機器の急速な普及が進んでおり、社会全体が大きな変革期に直面している現代においては、論理的思考力を携え、令和という新しい時代を切り開いていける人材の育成が求められており、そのためにICTを活用した教育の重要性が一層高まっております。

本市においても、タブレット端末の整備や「金沢市立小学校プログラミング教育ベーシックカリキュラム」の策定、市立工業高等学校「金沢型工業教育モデル」における、ICT機器を活用した教育環境の創出など、さまざまな取り組みを進め、一定の成果を上げているところです。

しかし、その一方で、教職員の指導力の向上や小学校プログラミング教育の本格実施、ICTを活用した外国籍児童生徒への対応等の課題もございます。そのような現状や課題を踏まえて、今後のICT教育の基本的な方向性についてご意見を頂きたいと思います。趣旨説明は以上です。

それでは、この後、事務局から資料を説明していただきます。

(寺井学校指導課長) 学校指導課の寺井でございます。小中学校におけるICTを活用した教育の推進についてご説明申し上げます。初めに、ICTを活用した教育の概要について説明いたします。次期学習指導要領は令和2年度より小学校で、令和3年度より中学校で完全実施となります。その総則には、各学校において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることや、各種の統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ることと示されております。

この次期学習指導要領の完全実施に向け、本市教育委員会では学習の基盤となる資質・能力の一つとして示された情報活用能力の育成に向けて、昨年度、産業政策課と連携して、お手元に置かせていただいている「金沢版子供プログラミング教育」を取りまとめること

ができました。その中では、人材育成のイメージとして、「触れる」「深める」「極める」の三つの段階が示されております。

義務教育段階が主に担う「触れる」段階では、全小中学校で、金沢ベーシックカリキュラムに基づく授業を実践することなどを通して、プログラミングを習い始める段階の子供たちが、楽しさや面白さを感じ興味を持つ場をつくり、児童生徒の主体性と対話力を育むことを目指しております。また、プログラミング教育だけでなく、児童生徒のタイピングスキルの向上など、児童生徒の情報活用能力育成のため、ICT を活用した教育の推進が求められております。

お手元の資料番号1は、本市の現状および成果と課題、今後の基本的な方向性について取りまとめたものです。それでは、資料番号1を基に説明させていただきます。

1として、ICT を活用した教育の推進について、「(1) 現状」を説明いたします。まず、タブレット端末については、平成27、28年度の2年間で児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた指導に生かすために、小・中学校通級指導教室が設置されている学校および特別支援学級設置校に整備しております。また、ドッキング型タブレット端末については、平成29年度のパソコン更新時より、学校の要望を聞きながら導入を進めております。

加えて、大型提示装置及びタブレット端末については、各学校独自の教材費等によって整備を進めております。さらに、金沢ベーシックカリキュラム実践推進事業において、「ICTの活用」をテーマとして研究している6校のうち2校では、公開研究発表会を実施することとなっております。

「(2) 成果と課題」について説明いたします。成果については、2点お示ししております。1点目は、特別支援教育では、個別の教育的ニーズに応じた多様なアプリケーションが導入されており、タブレット端末導入の効果が高いこと。2点目は、ドッキング型タブレット及び自校で整備したタブレット端末等により、普通教室の授業における積極的なICT活用が増えてきていることが挙げられます。

一方、課題については4点お示ししております。1点目は、電子黒板等ICT機器の整備状況、利用頻度、教職員のICT活用指導力に学校間差や個人差があること。2点目は、パソコンを使った授業で教員を支援するICTサポーターの配置について、学校の要望が増加していること。3点目は、タブレット端末等に整備に向けて、研究や実践の普及・啓発が必要であること。4点目は、ICT機器の通信量の増加により、教育用ネットワークの通信速度が遅くなっていることが挙げられます。

引き続き、2として、今後のICTを活用した教育の基本的な方向性についてご説明いたします。

(1)に4点お示ししました。1点目「児童生徒のICT活用や教職員のICT活用指導力の向上」については、学校指導課において、学校訪問を通じてICT機器の効果的な活用について指導・助言を行うとともに、教育プラザにおいては、今年度から新たに設けた「タブレット活用研修」を通じて、タブレット端末等の活用推進について取り上げます。また、ICTサポーターについては、各学校の要望状況を把握し、配置時間数等を検討してまいります。

2点目「タブレット端末等ICT機器の整備」については、これまでの成果を踏まえ、特別支援教育の充実に向けたタブレット端末等の更新を検討いたします。また、パソコン教

室へのドッキング型タブレット端末の設置については、特に小学校におけるプログラミング教育の実施を見通した上で、さらに導入を推進してまいります。加えて、教育プラザにおいては、教育用ネットワークの通信状況を把握し、通信速度向上の検討を行います。

3点目「特別支援教育における ICT 機器の利用推進」については、整備したタブレット端末等が効果的に活用されるよう、特別支援教育実践拠点校事業において、タブレット端末を活用した実践を報告し、他校へ広めるとともに、特別支援学級担当者を対象とした ICT 機器活用の研修会を実施いたします。

4点目「遠隔教育の導入推進に向けた検討」については、小規模校の課題解消に向けた合同授業など、多様な人々のつながりを実現する遠隔教育や特別な支援が必要な児童生徒の学習機会の確保を図るなど、個々の児童生徒の状況に応じた遠隔教育について研究を進めてまいります。

「(2) 小学校プログラミング教育の円滑な実施に向けて」については、先ほどお示しした「金沢版子供プログラミング教育」6 ページ以降にも掲載されておりますが、平成 31 年 1 月に「金沢市立小学校プログラミング教育ベーシックカリキュラム」を策定しており、モデル校にて先行的に実践を開始しております。

これを踏まえ、以下 2 点をお示ししました。1 点目「モデル校での成果や課題を踏まえた、プログラミング教材の整備内容等検討」については、本年度より、モデル校以外でも先行的に実施できるよう機器を整備しております。具体的には、9 月よりモデル校以外の 13 校において、プログラミング教材を貸し出し、プログラミングを体験するプログラミング教育実践推進事業を実施することとなっております。また、モデル校や先行実施校の成果と課題を踏まえ、機器の保管やメンテナンス体制等、来年度の全面実施が円滑に進むよう研究を重ねてまいります。

2 点目の「学校をサポートする体制の充実」については、教育プラザにおけるプログラミング教育の研修を実施するとともに、近隣大学や関係機関、ICT サポーターとの連携等により、学校をサポートする体制を広げてまいります。

最後に (3) として、増え続ける外国籍の児童生徒への対応については、本年 6 月より市内 2 校に対して、AI 翻訳機（ポケトーク）を本格的に導入しております。導入した学校からは、「大変役立っている」と評価を頂いております。

私からの説明は以上です。

(田鶴副校長) 金沢市立工業高等学校副校長の田鶴です。私から、市立工業高校における ICT を活用した教育の推進についてご説明いたします。資料をご覧ください。

「1 ICT を活用した教育の推進について」です。市立工業高校の現状を 3 点報告いたします。1 点目は、コンピュータの活用状況です。本校には、40 名が一举に授業できるパソコン教室 3 室、実習等で 20 名ほどが使用できる CAD 教室が 3 室あります。全学科を対象としてプログラミングをはじめ、ネットワークやアプリケーションソフトの活用等を学習しています。

2 点目は、タブレット端末の整備状況です。校舎全体に校内無線 LAN が整備されており、今年度、教職員用にタブレット端末を 12 台設置する予定となっております。

3 点目は、本校の根幹でもある、金沢型工業教育モデルにおける ICT 機器を活用した教

育環境の創出です。現在、図書館には放課後や長期休暇中にインターネットで学習できる環境が整備され、常時9台のパソコンが使用できる状況です。

それに伴う成果と課題ですが、成果として、3点挙げられます。1点目は、美術の授業でパソコン教室を用いて、CGソフトを活用した作品を制作しています。

2点目は、各工業科の専門授業の実習で、CAD・CAM等の学習に対し積極的に活用しています。

3点目として、教職員用パソコンは校内無線LANに接続することができるため、各教室でパソコン内の教材データをプロジェクターからスクリーンに投影しながら、一斉学習や協働学習を実施しています。

課題についても3点あります。1点目として、現行では、教員のパソコンからの教材を提示する一方方向の授業となるので、教員と生徒一人一人がタブレット端末で双方向な授業を展開できる環境の整備が求められています。

2点目は、義務教育でプログラミング学習をした生徒が本校に入学することから、より一層質の高いICT教育を実践するための教育環境づくりが必要と考えています。

3点目は、教職員のICT活用指導力に個人間差があることも課題となっています。

次に、「2 今後のICTを活用した教育の基本的な方向性について」です。一つは、新学習指導要領やICT化の進展への対応です。2022年度から年次進行される新学習指導要領に対応するため、新たな学習スタイルの構築を進めるとともに、急速なICT化による情報通信技術の進展に迅速かつ的確に対応できる教員の資質・能力の育成が不可欠となっていることから、今年度は教職員用タブレット12台や電子黒板機能付きのプロジェクター6台を整備し、ICT機器を活用した授業を積極的に展開します。

二つ目は、教職員のICT活用指導力の向上です。先進的に取り組んでいる学校への視察や大学・企業への派遣研修を実施するほか、教員の資質向上を目的に、校内で定期的に行っているMy研究授業では、ICT機器の活用を必須として、教員全体の指導力の向上と意識改革、改善を行っていきます。

最後に、その他のICTを活用した教育です。一つは、Society 5.0などに対応するために、あらゆる分野の業界で需要が拡大している、空の革命ともいわれるドローンの基本操作を、今年度から県内公立高校で初めて授業で学習することにより、大学等の高等教育機関でのさらなる知識・技術力向上につなげるとともに、実社会において即戦力で活躍できる人材育成に努めながら、本校で学びたいという生徒の確保の面からも、小学校を対象としたドローン教室も実施したいと考えています。

二つ目は、これまでも小学生を対象としたプログラミング講座や電子工作教室を通じて、地域との関わりを大切にしていることから、プログラミング教育を普及する拠点の一つとして位置付けることができないかを検討してまいります。

私からの説明は以上です。

(野口教育長) ありがとうございました。それでは、只今の説明を踏まえながら、この後、ICTを活用した教育の推進について、また、今後のICTを活用した教育の基本的な方向性について意見交換をしたいと思います。せっかくこれだけロボット等がそろっているのに、全部を動かすのは難しいと思いますが、ちょっとロボットやポケトークを動かして、

皆さんにご覧になっていただいたら話が弾むかなと思うのですが、いかがでしょうか。できれば、何か動かしてもらっていいですか。

(竹下主査) それでは、ポケットークを動かしてみます。基本的には、ポケットーク自体がインターネットとつながっております。インターネット上にAIでできている翻訳のクラウドサーバー管理機がございますので、かなり多くの言語に対応できる形になります。ですから、インターネット環境が不十分なところであっても、どこでも活用できる翻訳機となっております。

基本的には、ボタンを押しながら日本語をしゃべると、変換されます。今は分かりやすいように英語を選択させていただきます。

「プログラミングは楽しいですか」

—POCKETALK (ポケットーク) による翻訳—

聞こえましたでしょうか。このような形で数秒で英語に翻訳できます。

杜の里小学校など、外国籍の児童生徒の多い学校において、非常に好評な状況でして、今後の推移も見据えながら導入状況を検討できればと考えております。説明は以上です。

(野口教育長) ありがとうございます。前にあるロボットについても、学校では有効に使っております。ではこの後、意見交換を進めていきたいと思っております。

それでは、教育委員の皆さんの方で、何かご意見のある方はいらっしゃるでしょうか。岡委員、どうぞお願いいたします。

(岡委員) 小・中学校におけるICTの活用について説明いただき、また、市立工業は専門ということで、かなり高度なことを勉強しておられるなという話を聞きました。学校訪問などをさせていただくと、全ての先生方がきちんとICTの授業を教えておられるということで、そういう専門員を雇っているのかなと思ったのですが、そうではなく、先生方が勉強して教えているということをお聞きしました。

そのような中で、資料にも書いてありますように、教職員の指導力の個人差などというものはまだ感じられると書いてありますが、その辺りのことについてどのような対策、研修を考えておられるかということをお聞かせいただければと思います。

(松本教育プラザ総括施設長) お尋ねの件ですが、ICTを活用した教育の推進をしていくには、その前提として、教職員の一定レベルの指導力は欠かせないと考えております。課題でもありましたように、教師の間での差があったり、学校間差があったりするのは事実なのですが、極力その差を解消するために、まず研修が大変重要になってきていると認識しております。

先ほど、今後の方向性の中でも一部説明させていただきましたが、本市ではこれまでも初任者研修の中でICT活用の研修を実施してきておりますし、今年度から新たに四つほどのICT関係の研修も加えております。例えば、10年目までの若手教員を対象とした研修の

中に、ICT 活用研修を盛り込んだり、あるいは自主研修の中でタブレット活用研修を設けております。

それから、若手教員研修のコーディネーターをする中堅の教員向けの研修の中で、実際にスマートフォンを使って閲覧をしながら、操作を行うような研修も取り入れております。

ICT 分野の進歩というのは非常に目覚ましいものがありますので、今後とも時代に遅れることのないように工夫し、また、学校間差や教員間差をできるだけ解消し、教職員の指導力向上に努めてまいりたいと考えております。以上でございます。

(野口教育長) やはり、学校には、ICT をしっかりと使って子供に教える核となる先生が1人どうしても要るので、そこはやはりポイントになると思います。今、プラザの方からご説明がありましたが、今後ともまた、研修を充実していただくとよろしいかと思えます。他の委員はいかがでしょう。では、大島委員。

(大島委員) 私も企業経営をしております、もはや社会に出ると ICT 機器を使えないと仕事にならないというぐらいの環境になってきております。そういった意味では、今回の ICT を活用した教育については非常に大きく期待したいと思っています。今ほどありましたように、恐らく教職員の方々は、年齢に応じて知識や技術は違ってくると思うので、そのあたりの研修等の充実はしっかりお願いしたい。それと、子供たちについては、生まれたころからそういった機器がそばにあって、環境さえ与えれば、そういった意味でのスピードというのは鍛えられるのかなと思うのですが、われわれが環境をしっかり整えていく必要があるのではないかなと思います。

それと、最近、弊社の方も新卒採用の若いスタッフが入ってくると、スマートフォンに慣れ親しんでいるところだと思うのですが、なかなかタイピングがうまくできないというような偏った部分もあるので、そういった部分もしっかりと、こういった時期から教育に取り入れていただけるとありがたいなと思えます。

(野口教育長) 今いろいろな機器をそろえていますが、タイピングという話がありましたが、その点について何かご意見は。

(寺井学校指導課長) 小学校においては、高学年の時期からパソコンを使った授業は実施しておりますが、実際にはローマ字等を学習する3年時ぐらいからは、基本的にはタイピングを進めながら入力をして、文字を使って学習するというのを進めております。ただ、子供たちはどうしても、最近は画面をタッチして動かすことには大変慣れておりますが、今ご指摘いただいたとおり、タイピングや実際に打ち込むというような作業については、丁寧に指導していくことが、情報活用能力を向上させていくことにもつながるのではないかと考えております。

(野口教育長) いわゆるタブレットとドッキング型のものを整備しながら、タイピングにも慣れていくということでもよろしいですね。

(寺井学校指導課長) ドッキング型の場合は、子供たちがタブレットを使って、生活科でしたら、自分の育てた植物の画像を撮って、それを大型のスクリーンに映し出して、お互いのものを見合ったり、意見交換するようなことで活用が図れていますが、レポートの作成などになると、やはり文字入力なども必要になってきますので、段階に応じた指導ということもベーシックカリキュラムの中で位置付けて、計画的な指導を進めてまいりたいと考えております。

(野口教育長) ありがとうございます。では、他の教育委員はいかがでしょう。では、田邊委員。

(田邊委員) 来年度の小学校から始まる学習指導要領で、プログラミング教育がいろいろな教科で取り入れられているのを予定されていますが、これまでは得てして、今のタイピングに慣れるだとか、あるものをどう使うのかというところの習熟を図っていた。それに対して、これからプログラミング学習をどのようにして作っていくのかというところにシフトしていくことになります。

学校での取り組みもさることながら、公民館等でも子供たち向けのプログラミング教室ですか、いろいろな子供向けの取り組みを活発に展開されるという現状がこれからも広がっていくと思います。その折に、このような教材を貸し出しされるというサービスも始まっていると聞いておりますが、先ほどの説明にもあったように、学校としては ICT 支援員を要請されています。それから、工業高校の取り組みでは、地域との関わりをととても大切にしていきたいという説明がありました。

これらをうまくつなげていくと、金沢での ICT 環境として上手に人材を育成していく格好のサイクルが出来上がると思います。さらに、ICT を活用できる人材をより一層拡充していくための具体的な取り組みという点で、目指しているところや、今後の展開として柱とするようなことがあれば、お話ししたいと思いますが、どうでしょうか。

(野口教育長) 今日は土村産業政策課長にもご出席いただいておりますので、金沢市の状況についてお話を頂戴できればと思いますが、いかがでしょうか。

(土村産業政策課長) はい、分かりました。今、皆さまに資料でお渡ししているのは、金沢市全域における ICT 人材の育成ということで、まとめたものです。田邊委員のご質問の件に関しては、この中にも入っておりますし、先ほどから質問や回答にもあった、小学校低学年はタイピングがなかなかできないということがありますので、ビジュアルプログラムという、右へ動きますとか、回転しますなどのツールを組み合わせでプログラミングしていきます。小学校 3 年生、4 年生ぐらいになると、タイピングをして、本来のプログラミング、C 言語を学んでいくということを通して、プログラミングに広く触れる機会にしたいと考えております。

今、お手元にはロボット教材がありますが、それは IchigoJam という、小型のマイコンを組み込んでロボットが動くというものでありまして、それをパソコン上で操作することによって、いろいろな動きができるというものです。こちらは micro:bit というものです。

し、青いものが IchigoJam という小型マイコンが入っているものです。そのようなものを通しながら、プログラミングに触れる機会を増やしていきたいと思っています。

資料に戻りまして、先ほどから皆さまもお話のあった、全小学校全学年でのプログラミング授業の開始を踏まえまして、市教育委員会と連携しながら、就学前児童から高校生を対象に、子供の習熟度に合わせたさまざまな学びの機会を提供することとしております。そこで、今年度の取り組み、以下五つの点をそこに掲げさせていただいております。

一つ目は、「みらいクリエイター養成塾」を開催しております。これは最先端のテクノロジーと金沢が誇る伝統・学術・文化を組み合わせながら、ものづくりやプログラミングを行うプログラムを来年3月まで、毎月いろいろなテーマで行っております。

表の講師の欄を見ていただきますと、一番上にある市のプログラミング教育ディレクターの松田氏は、東京小金井市の前原小学校の校長先生をされていましたが、退職されまして、IT ビジネスプラザでお仕事をいただいております。この方を中心に、全国に誇れる地元の多彩な講師陣により、子供たちの自発的な能力向上を図るプログラムとなっております。併せて、IT ビジネスプラザには、オンラインで自主学習ができる環境を整えています。

二つ目の「キッズプログラミングスクール」ですが、市の主催として、今年度5回開催いたしますが、毎回定員のあるメニューについては、4,5倍を超える申し込みがあります。また、その他に自由参加できるようなプログラムもありまして、毎回多くのお子さん、保護者の方もご参加いただいております。

そのようなこともありまして、三つ目となりますが、先ほど田邊委員の方からご質問のありました、キッズプログラミングスクールを昨年度から地域展開しています。併せて、地域の方々がサポーターになっていただきたいということで、サポーター育成の事業を始めました。公民館や児童館が主催するスクールに、機材の貸し出しや専門講師の派遣を行いながら、保護者や地域の方々にスクールサポーターとしてのノウハウを学んでいただく機会を提供して、今年度は体験会を5月～7月に3回開催しております、計46名の方が参加しています。

このような方々が、子供たちと一緒に触れ合うことによって、自分たちがプログラミングを子供たちと一緒に学習する。今後学校をサポートする体制の充実として、このような方々が人材として活躍してほしいと私たちは考えております。

四つ目はロボットコンテストへの参加で、世界ロボットオリンピックの全国大会の予選会も開催しております。それに、「こどもプログラミングサミット」というものを12月26日に開催することとし、プログラミング授業の開始直前に合わせて、プログラミング教育の普及ミーティングと、小学生による「かにロボットコンテスト」を開催しながら、プログラミングの楽しさを学んで欲しいと思っています。

五つ目は、論理的思考力を育む手順を活用しながら、就学前児童の子供たちの知的好奇心や柔軟で独創的な発想力を育成する体験会や出前講座も、10月に予定しています。

今後の取り組みとして、これは確認や検討事項になりますが、一つ目がスクールサポーターとして育成した地域人材の学校現場での活用策。また、二つ目は先ほど言いました松田ディレクターによる児童生徒への指導と教職員の皆さまへの助言の継続。そして、三つ目、四つ目はもう少しプログラミングを深めたいというお子さんや、みらいクリエイター受講生に対して、大学の研究室や企業ラボでの活動を少し支援すること。また、ロボット

オリンピックの全国大会につながる予選会を石川県内で、小学校は金沢市、中・高は津幡町教育委員会で行っていますので、そこを一体的に行うことにより、石川中央都市圏の枠組みで実施していくようなことも、これから考えていきたいと思っています。

(田邊委員) ぜひ子供たちがわくわくするような取り組みができるように、よろしくお願いします。

(野口教育長) それでは、他の委員から何か。はい、早川委員。

(早川委員) 今年、教科書を選ばせていただきました。ということは来年4月からその教科書が新しく使われるのです。非常に画期的な変化がありました。各教科の教科書にQRコードが付きました。これまで紙だったものが、QRコードからインターネットに接続され、いろいろな情報が入ってくるのです。

そうすると、タブレットを持っている子供たち、スマホを持っている子供たち、何も持っていない子供たち、不公平感が出ないかなと心配です。せっかく取り込んだ動画や音声などの情報を、先生方が本当に最高に活用できるのかどうか。今もいろいろなご意見があり、先生方に差があるのではないかという不安が出ていました。そのようなことに加え、機器を貸し出すにしても、全員に渡するのか、それとも限られた人だけが共用するのか心配です。

もう一点。世界的に、識字率とは、これまでは「読み書きそろばん」でした。しかし今日では識字率リテラシーが話題になると、言語とコンピュータの両方をきちんと使いこなせなければ、紙と鉛筆と消しゴムがない人になっています。どうやって全体的なりテラシーを上げていくのか心配です。

先ほど、松田先生のお話が出ました。今まではタブレットがあれば、全ての教科に対応できると思っていました。松田先生が「やはりタイピングができないと仕事もらえない」とおっしゃっていたのです。先ほどの大島委員のご意見も大事だと思います。松田先生は「キーボードは、すごく安く入手できますから」とおっしゃっていました。「今はタブレットの方が高いよ」とか。しかも、その技術をハンディキャップの人が使えたら、見えない人や聞こえない人、話せない人など、彼らの行動範囲や能力範囲が広がるのと思います。

(野口教育長) はい。では、これまでの話を総括してみると、一番大事なのは、児童生徒がこれから生きていく世の中を見据えたときに、ICTの利活用は、できなくてはならない。そのためにも一番重要なのは、先生方のICTについて指導できる力がとても大事なので、そこをもっとアップしなければいけないのではないかということで、一層の研修の充実が大事だろうということ。これが一つ目だと思っています。

もう一つは、市立工業高校においても、同じように先生と生徒が双方向で、それを使いながら授業を進めていくことがとても大事だろうということですし、さらに恐らく県内で初めてになるかなと思うのですが、ドローンを使った指導というか授業というか、そのようなものを含めた先端技術を駆使して、やはり市立工業独自の学習スタイルを構築していくことが、これからますます求められていくのだろうということに帰結していくのかなと

思いました。今のお話はそのようなまとめでよろしいでしょうか。

3. 青少年の育成について

(野口教育長) それでは、2番目の協議題に移りたいと思います。「青年少年の育成について」ですが、これにつきましても、始めは私から趣旨説明をさせていただいた後、事務局から説明させたいと思います。その後、意見交換を進めてまいりたいと思います。

今回、この協議題としましたのは、先ほど、市長の挨拶にもありましたが、7月7日に青少年の活動拠点として、「長土堀青少年交流センター」が完成しましたことから、この新しい施設の完成を機に、金沢市でどのような青少年の育成事業を展開していくべきか。そのようなことを考えてご意見を頂戴したいということが、大きな理由になります。

本市では、これまでも「金沢子供条例」や「金沢市教育行政大綱」、またその基になる「金沢市学校教育振興基本計画」や「金沢市生涯学習振興基本計画」に定める基本的な方向性に基づいて、さまざまな青少年育成事業を行ってまいりました。

詳細については、この後、事務局から説明させていただきますが、金沢少年の翼、またはリーダー育成研修、ジュニアかなざわ検定、ふるさと教育、子供たちの探究心と創造力を育む宇宙教育といったいろいろな分野で事業を推進してきております。

一方で、青少年の育成を支援するためには、家庭または地域教育力の向上も不可欠であることから、今年は市内41校区で地域学校協働活動を展開しておりまして、家庭・地域教育力の推進にも、併せて意を用いてきたところです。

しかしながら、時代が移り変わるとともに、青少年の取り巻く環境や社会のニーズも変化していくことから、幾つか課題も見受けられるのではないかと考えております。

それでは、青少年の育成について、また、それぞれ教育委員の皆さまや市長さんの方から、ご意見を頂戴したいと思います。初めに、事務局から説明をお願いします。

(村田生涯学習課長) 生涯学習課の村田です。それでは私からは、資料「青少年の育成について」をご説明させていただきます。

初めに、「(1) 育成する子どもの姿」についてお話ししたいと思います。「子ども条例」や「めざすべき金沢の子ども像」から整理しますと、6点ほどあると考えております。

「自ら考え、判断し、行動する力」「健やかで思いやりのある心」「金沢を愛する心」「社会の一員としての責任感」「世界に通ずる広い視野と豊かな国際感覚」「夢を抱き、何事にも挑戦する心」。これらを持った子供の姿を目指していきたいと考えているところでございます。

次に「(2) 青少年育成推進事業の現状」についてご説明させていただきます。まず、青少年リーダーの育成についてです。「金沢少年の翼」派遣研修ですが、第40回となる今年度は、7月に4泊5日の日程で、小学生23名が参加しまして、東北方面の会津藩校日新館、国立天文台や、JAXAの宇宙関連施設、東日本大震災の被災地などで研修を実施いたしました。

次に、金沢市長土堀青少年交流センターの開設でございます。次代を担う青少年の主体的な学び並びに青少年相互及び青少年と他の世代との交流を促進し、健全で活力に満ち、

創造性豊かな青少年の育成を図ることを目的とした施設でございます。

今年度、交流センターを拠点としまして、青少年が地域活動に主体的に参画し、次代を担うリーダーの育成と地域を活性化する人材育成を目指す「かなざわユースプロジェクト推進事業」を実施しているところでございます。

また、内閣府が今年6月に「まち・ひと・しごと創生基本方針2019」を策定しまして、第2期の総合戦略策定を目指していると聞いております。この中でも、人材を育て生かす、誰もが活躍できる地域社会をつくるなど、新しい視点が示されているところでして、そういったことから、この交流センターが地方創生の拠点としても活用できるのではないかと考えているところでございます。

次に、ふるさと教育の推進でございます。ジュニアかなざわ検定ですが、ふるさと金沢を知る意欲を引き出し、将来金沢の魅力を国内外に広く発信できる人材を育成するため実施しているものでございます。

この実績は昨年度ですが、小学校4年生～中学校3年生と保護者の合計で6,420名が受験しまして、ジュニアかなざわ博士は小学校6年生1名が選ばれたところでございます。

次に資料の右側を見ていただきたいと思います。ふるさと体験学習でございます。金沢の文化施設等の見学と伝統工芸を体験するプログラムを組み合わせたバスツアーを実施しています。昨年は485名の参加がありまして、金箔貼体験や、水引体験、茶道体験などを行いまして、ふるさと金沢への愛着や誇りを深めたものでございます。

次に、家庭・地域教育力の推進でございます。地域学校協働活動ですが、地域と学校が連携・協力しながら地域全体で子供の学びと成長を支え、地域を活性化する活動を推進する事業でございます。昨年度は、小・中学校合わせて31校で実施し、今年2月には「地域と学校 げんきフェスタ」を開催しまして、成果発表と地域同士の情報交換を行ったものでございます。今年度は41校区に拡大して実施しているところでございます。

次に、宇宙教育の推進についてです。金沢市宇宙教育推進計画をベースとしまして、宇宙教育を通じ、子供たちの探究心と想像力を育み、将来、宇宙産業に携わる人材を育成したいとの思いから、キゴ山ふれあい研修センターにおいて、各種事業を実施しているものでございます。

例えば、「①金沢宇宙塾」ですが、昨年度は16回、386名の参加で、手作りのプラネタリウムの製作、熱気球製作や天体観測などを実施いたしました。「②プラネタリウムの魅力発信」ですが、「よちよちプラネタリウム」は7回で250人の参加、「星と夜空の音楽会」は3回で235人に参加していただきまして、「キゴ山4シーズンビュー（星空解説）」なども行いながら魅力発信を行ってまいりました。

今年度の新規事業としましては、「金沢こども衛星アイデアコンテスト」を実施しています。これは、小学校4年生～高校3年生を対象としまして、「金沢を楽しくする人工衛星」などといったテーマで人工衛星のアイデアを募集したり、小学校1年生～3年生では、「宇宙絵画コンテスト」として、宇宙に関する絵画を募集したりしています。優秀な作品を表彰することで、子供の宇宙に対するあこがれや探究心を育み、子供たちの作品を生涯学習施設で展示したりするなど、今それぞれ予定しているところでございます。

最後になりますが、「里山教育等の推進」でございます。娯杉少年の森や土子原野外こども広場におきまして、親子自然体験塾や野外体験学習として、延べ4,662名が参加してお

ります。テント泊や自然観察、トレッキング、天体観察など、豊かな自然環境の中でさまざまな体験を通して、青少年の育成や協調性、生き抜く力を育む事業を毎年実施しているところでございます。

(野口教育長) ありがとうございます。今ほどの説明ですが、青少年の育成について、現在、金沢市では「子ども条例」や「めざすべき金沢のども像」から、今の説明の一番目にありますが、①～⑥の育成する子供の姿を定めて、そのためにさまざまな取り組みを行っているところです。

ところが、育てるために様々な取り組みをしておりますが、やはりその中でもまだ課題はあるのではないかと、どのような課題があるのかな、青少年育成についてどのような課題があるのだろうかということを少し整理して、さらに生涯学習の方で事業をこれから展開していきたい、そのような思いで、今のご発言だったと思いますので、委員の皆さん方は、特に青少年育成の課題に論点を絞っていただくとよろしいなと思います。いかがでしょうか。はい、大島委員。

(大島委員) 私はずっとPTA活動をやっておりましたので、最近もPTA活動の現役メンバーとお話をする機会があったのですが、その中で課題をいろいろ聞くと、やはり第一が人材不足というか、次なるリーダーがなかなか見つけにくい。それに加えて、次世代の若い方々を巻き込んでいくことが、前に比べても非常に難しくなっていると思います。

われわれの時代は、どちらかというと先輩から「一緒にやらないか」みたいな感じで言われて、その地域活動に参加するというので地域の方々とコミュニケーションが取れて、例えば「ありがとう」などと言われるとうれしくなって、またうまくつながっていくような部分はあったのですが、最近はなかなかそういったものが切れているというか、個人と地域の関係が非常に薄くなってきているのかなと思います。

それと、先の選挙にもあったとおり、やはり投票率も若い世代が極端に低いところからも、やはり自分自身が社会の一員、コミュニティの一員であるという責任感が非常に希薄になっているのではないかなと、少し心配しているところです。

そのような中でもこういう長土塀青少年交流センターの中で、いわゆる「かなざわユースプロジェクト推進事業」のような形で、「青少年団体間のネットワークの強化」もありますとおり、こういったところでPTAとの連携を取っていただいて、そういったものをお互いの地域の中での課題を、お互いに議論し合うというのも、非常に面白いなと思っています。これは意見です。

(野口教育長) ありがとうございます。地域の中での人材育成ということと、地域のコミュニティへの帰属意識がやはり希薄化しているなどということもありますし、やはり社会の一員としての責任感、そのあたりのご意見を頂きました。そのようなことをこれから課題として、これから考えていけばいいのではないかと、ご意見でよろしいでしょうか。他にご意見はありますか。はい、早川委員。

(早川委員) 子供たちについては、小・中学校として、地方自治体の市町が管轄してい

ます。いろいろな問題がありますが、不登校も大きな問題です。コミュニケーションが非常に苦手です。口頭で話さなくて、スマホで文字にして、話し相手もスマホで文字にして、なぜだかメールで会話をしています。会話をしない子供たちについては、すごく心配になります。実際に不登校が始まると、それぞれのケースが多様な問題を抱えています。対処が非常に難しいですね。

そんなときに、長土塀青少年交流センターが役立ちそうです。このごろメディアでよく紹介されている「フリースクール、インスクール」も良い取組みだと思います。学校の中にフリースクールがあって、不登校児が少なくともそこへは来られるようにしようねと努力されているようです。そのような工夫がもう少しなされて、選択肢がたくさんあるといいなと思います。

もう一点。自分がいろいろな国籍の人と仕事をしていて一番心配なのは、「日本の若者は、なぜ成熟していないのか」との質問です。答えに窮します。では子供たちが成長するどの段階で、成熟していくのかなと調べると学校側は、本当にいろいろな工夫をして、サポートして、これ以上もう考えられないのではないかというお膳立てがあります。それでも、大学に入ったときに、留学生たちと会話ができないとか、向こうからばかにされるとか。外国に出たときに、何か起きたとき、自分を処すことができないなど、とても心配です。

(野口教育長) はい。いろいろなところに出ていったときに、コミュニケーションに対する苦手意識がとても強い。そのあたりを、もっともっと改善していかなくてはいいけませんし、何か社会に出たときにつまずいたことがあれば、そのつまずきによって、なかなかそれを改善とか回復していくことが弱くなっているのではないかと。心身共に課題を有する青少年が増えてきているというご意見だったと思いました。

(野口教育長) では、他にどうでしょうか。はい、木村委員、どうぞ。

(木村委員) 青少年の育成についてということで、最近のニュースの、痛ましいいじめなどを聞きますと、少し手を差し伸べてあげれば防げたものもあったのではないかと思います。ことが多くて、現状として核家族化で進んでいますので、年代の違う、異なる年齢間や同じ世代の方でも、やはり交流が少なくなっているのかなと思います。先ほどの言葉でも全部文字で済ませたりして、どうしても前よりは希薄になっているのかなと思います。

それで、次代を担う人材を育てる新しい場所としての環境が必要だと思います。本当にこれだけのいろいろな取り組みがあるので、これは本当に十分過ぎるような内容だなと思って今日伺ったのですが、やはり心身共に健全な子供たちが育つことを願っています。

(野口教育長) ありがとうございます。今のご意見をまとめるとすれば、いわゆる今の青少年たちと他世代との交流みたいなものや、同じ世代の交流というのができる新しい場所としての環境を整えていく。

そういった意味では、今の新しくできた長土塀青少年交流センターはとても活用する大きな意味合いがあるのではないかなというご意見だったと思います。今の木村委員のご意見を受けながら、今回できました長土塀交流センターの利用拡大について何かご意見があ

れば頂戴したいと思います。いかがでしょうか。

先ほどから何人か、大島委員や早川委員がお話に出していただいておりますので、村田課長、今のご意見で大体大丈夫でしょうか。

(村田生涯学習課長) 現在は、長土塀青少年交流センターのサポーターを募集しまして、若い人に地域の活動をいろいろ経験してもらおうという取り組みをやっています。また、これまで青少年団体間の交流はあまり積極的にされていなかったもので、そういった青少年団体間の交流をするという意味で、交流会を催すということも、今後取り組んでいきたいと思っています。以上でございます。

(野口教育長) ありがとうございます。それでは、村田生涯学習課長からもある程度まとめていただきましたので、他の委員はいかがでしょう。田邊委員はいかがでしょう。

(田邊委員) 若者とといいますか、青少年の気になることや、今の姿とか、ご指摘のようなところを縷々感じます。昔と比べて体格や体つきは十分早熟過ぎるぐらい早熟になっていると思うのですが、一方で心というか精神的な成熟は、世の中がどんどん便利になるのが理由の一つ、あるいは家族形態や地域での過ごし方などが変わってきたことが大きな原因だと思うのですが、精神的に大人になるのが逆にちょっと遅くなり始めているのかなと思うのですね。

日々、大学生と接していても、昔の高校生ぐらいの感触を持ったりします。それは自分が年を重ねたせいなのかと思わざるを得ないのですが。一方で、いろいろな接触の機会がある中で、早川委員がおっしゃったように、ちょっと気なることを外から指摘されていることも多々ありますので、それが本当に今、若者や子供世代を含めて大きな課題だと思います。

そういう課題や、現在の若者や子供たちがどういう状況なのかというのを、できるだけ正確に把握することは、ぜひ必要なことかなと思います。感触や感覚で話している部分もありますので、ぜひ実態がどうなのかというのを、できるだけ正確にきめ細かくつかむことも必要かなと思うのですね。

そうは言いながらも、すごいリーダーシップを発揮する若者もいますので、やはりそういう人がいるのだということも知る必要があると思うので、総じて弱くなったという感触を持ちがちですが、やはり正確にどのような姿なのだろうかということをつかむことも必要かなと思うのですね。

確かに気になる子供たちや若者もたくさんいるような気はしますが、それはたまたまそういう見え方、あるいはそういう経験でしかないのではというところもあると思うので、金沢市では「学生のまち」を標榜して青少年を育てるような機会を、接点をつくられていますので、やはりそのような中で育てていく、あるいは育ててきている場があると、活躍できるような若者もたくさんいると思いますので、できるだけ正確に情報をつかむようなことは、心掛ける必要があるのかなと思いますね。

そのような中で、やはり担い手を育てる、時代を引っ張ってくれるような、あるいは同

じ世代をしっかりリードしていくようなことに、やはり行政や大人として働き掛けて、それを伸ばしていけるようなチャンスや機会をどう作っていくのか。本当に長土塀青少年交流センターなどは、とても大きな拠点になると思いますので、そういう仕掛けの場として活用できるようなフィールドになることを期待します。

先ほど指摘のあった、意欲的に活動する人たちがたくさん集合する団体がいろいろありながら、得てしてこれらの団体間の交流が弱かったという課題については、原因は多々あるでしょうが、ぜひ仕掛けとして、仕組みとして団体間での相乗効果が生まれるような交流拠点として、文字通り青少年交流センターが拠点となることを期待します。

何よりも、多様な人材が市内外にたくさんいらっしゃるので、そういう方々がつながりをつむげるような場となり、交流拠点として多様な取り組みを展開していけるようになることを期待しています。

(野口教育長) ありがとうございます。それでは、最後に市長からお願いします。

(山野市長) はい。うちの子供が、もう大きいのですが、学童野球をやったときに思ったのですが、学童野球、少年サッカーもそうなのですが、その中で完結というのは良くないですね。その中で、もうサロンになってしまっているのですね。

僕が気になったのは、地域の社会体育大会をしている隣で学童野球が練習しているのです。僕は指導者に「おかしいだろう」と言いました。やはり学校があって、地域があつての学童野球であり、少年サッカーであり、ミニバスケットなのに、地域の社会体育大会をしている時に学童野球の練習試合へ行くのは絶対おかしいと思っていて、今はどのような状況は分かりませんが、多分、今もあまり変わらないと思うのです。

そこはやはり、せっかくいろいろな活動をされていて、野球やサッカー、ミニバスケットをやっている子は、こういう経験と違う経験ができていますので、それはそれでいいのですが、でも、やはり地域があつてこそその活動だということを、これは指導者の問題だと思いますが、指導者がきちんと認識してほしいなと思います。

僕はそのようなことを言い続けていて、JCのあすなろファンドに関しても言っていたが、それは教育委員会であつたりとか、スポーツの部署であつたりとか、先ほど村田課長から団体同士の連携という話が出ましたが、ぜひそのような視点でいま一度きちんと進めてほしいなと思っています。

もう一つは、先ほどフリースクールのお話も出ましたが、野球やサッカー、ミニバスケットなどの活動に参加できる子はまだいいのです。いろいろな事情、いろいろな厳しい環境の中で、それは家庭であつたり個人のこともあるかもしれませんが、こういう活動、野球もミニバスケットも参加できない子供たちがいます。

そのような厳しい環境の子供たちにどのようなサポートをすることができるのか。時には教育委員会の枠を超える必要もあると思います。教育プラザもそうですし、時にはつらいけれども警察のお力もお借りしなくてはいけないこともあるのかもしれませんが、当然、地域の方のお力はお借りしなければいけません、何かそのような子供たちにこういう活動に関わってこられるような環境も必要だなと感じています。

難しいのですが、喜成さんがこども食堂ですごい活動もしていただいています。この活

動も大事ですが、広い視点からいろいろな厳しい環境の子供たちにも関わってもらえるような仕掛け、仕組みが必要だなと思っています。

(野口教育長) ありがとうございます。今日は市長をはじめ、各教育委員の皆さんから、たくさんのご意見を頂戴しましたが、地域や関係団体との連携強化が一番大事なのだなということを、改めて、お話をお伺いしながら思っていました。今日頂きましたご意見を基にして、青少年の育成に係る施策について、これから一生懸命考えて取り組んでまいりたいと思います。本当にありがとうございました。

それでは、司会を事務局にお返しします。

閉会

(高葉企画調整課長) ありがとうございます。本日協議いただいた議題につきまして、皆さまからのご意見を受け止めまして、教育委員会と首長部局で連携を密にしながら、一つ一つ前に進めてまいりたいと存じます。

これをもちまして、本日の会議を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。